

営農情報

第102号平成23年2月28日発行

(イチゴ)

J A 福岡大 城
久留米、南筑後普及指導センター

2月の生育経過及び3月の管理方針

2番果房の収穫は、早期作型で1月下旬から始まったが、1~2番果房間の内葉数のばらつきや果実成熟の遅れにより、2月の出荷量は増えなかった。普通作型では、頂果房の収穫が遅れたため2番果房はでそろわず、全体に出荷が遅れ、2月下旬に増加している。

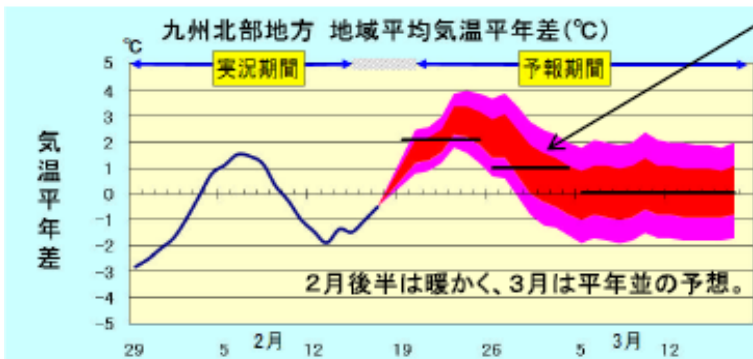
3番果房は、早期作型で着果期であり、3月中下旬頃からの収穫が見込まれる。

2月中旬までは低温、着果負担により芯葉の展開が遅かったが、気温が上昇したことにより、2番果房の収穫がすすみ着果負担が軽減するほど草勢が回復しつつある。3月下旬からの出荷量の増加にむけ、2番果房の収穫終盤までに株の手入れや防除を行い管理が遅れないようにする。

長期予報では2月下旬以降は平年より高温に推移するとされ、日照も徐々に強くなるために、「果実の傷み」が発生しやすくなる。常に生育状況を観察し、適切な草勢の維持と温度管理を徹底する。

病害虫では、ハダニ類、スリップス類が増加傾向にある。早期発見・早期防除に努め、2番果房収穫終了後には必ず防除する。

3. 1か月予報(九州北部地方:2月18(金)発表)



長期予想では、3月初めまでは平年より高い気温で推移、とされていますが気温の急変もありまして、ハウス内気温の変化に注意し、果実の傷み、薬害などに注意して下さい。

今後の管理について

● かん水・液肥施用

かん水は、少量多回数かん水を励行する。出荷量増加および温度上昇とともに、かん水量や回数を徐々に増やすようにする。pFメーターを設置している場合は、pF値1.7位を目安にかん水をする。灰色かび病などの多湿性病害が発生している場合は1.8~2.0とやや控え、湿度を上げないようにする。また、軟果対策として「かん水」は収穫直後に行い、収穫前日のかん水は控える。

液肥は、窒素成分で0.5~0.7 kg/10aを控えめに行い、3月のうちに終了する。

草勢が強く果実着色が進まない場合や、2番果房と3番果房の間が開いている、など先青果が発生しやすい条件では、施用を控える。

● 摘果（着果制限）

3番果房以降の着果数は3～5果／枝にするが、果梗の強さを考慮して調整する。

● 果梗の除去と芽の整理

収穫が終了した果梗は、キズ果防止、黒カビ発生予防と次果房出蕾促進を目的に、随時除去する。

極端に小さい脇芽は除去しつつ、芽数は4～5芽を確保しておく。



● ダニ、スリップス防除

ダニが発生している株は、強めの摘葉を行った後に、防除薬剤が葉裏まで付着するように丁寧に散布する。スリップスは開花している花への寄生を見逃さず、早期に防除を行う。

2番果房収穫終了後には必ず防除する。ハウスを解放する時期になると害虫が侵入しやすくなるので早期発見に努め、ハウス回りの除草も励行する。

● 灰色かび病予防

気温が上昇しており、換気不足や蒸し込み気味のハウス管理の場合、灰色かび病、菌核病の発生が目立っている。日中の換気を十分に行い、月1回の定期的な薬剤防除をする。

また発病した果実、花、果梗などの残さはすみやかにハウス外に持ち出す。

● 温度管理

温度管理は品質を保つために、晴天日はサイド・谷・つま面の換気を早朝より行い、できるだけ低温で管理する。

夜温が7℃以上の場合は、夜間も開放する。

3月中旬以降は遮光資材を活用し、昼間の降温を図る。ビニールへの塗布は、一度に濃くせず、1回目は薄めに行い4月に再塗布する。遮光資材は基準となる濃度で使用する（濃すぎるとミツバチが飛ばなかったり、徒長による病害発生につながる）。

【 温度管理の目安 】	
昼間	低温管理とする 午前：18～20℃ 午後：18℃以下
夜間	3～5℃ 夜間7℃以上は開放

● 電照

2番果房の着荷負担が軽くなり心葉が外葉より立ち上がり始めたら、電照を終了する。

しかし、電照終了後、3番果房最盛期等に心葉の伸びが悪く、展葉が極端に遅くなる場合は電照を再開する。（2時間程度）

● 軟果対策

高温期ほど果実の着色が早くなり、収穫遅れによる「過熟果」が多くなる。

高温期には収穫日の間隔を短縮し、収穫時の着色基準を厳守する。

収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、収穫後は早めに低温の場所へ移す。



果実付近の通風を確保する

また、果実付近の通風が悪くなっている場合は、果実表面に「かび」の発生が懸念されるため、葉除け等を行い果実付近の通風を確保する。また、果梗の除去も発生防止につながる。

親株の管理について

3月から「炭そ病菌」の活動が始まるので、薬剤防除は3月始めから計画的に実施する。3月のはじめの頃、芯葉が伸長し始める前に親株の下葉、花蕾、果房の除去を行う。

「炭そ病」は、株の傷口より侵入するケースが多いので、下葉・花蕾、果房除去の前と直後の2回の防除を必ず行う。特に、手入れ直後（当日または翌日）の防除は遅れないようにする。

薬剤（使用例）について（農薬混合表、農薬のラベルを必ず確認）

灰色かび病

薬剤名	濃度	使用時期	使用回数	備考 注意点
ジャストミート顆粒水和剤	2000～3000	前日	3	セイビア-との混合剤
セイビアーフロアブル20	1000～1500	前日		予防剤
カンタスドライフロアブル	1000～1500	前日	3	
フルピカフロアブル	2000～3000	前日	3	散布
	50			常温煙霧(うどんこで登録)
ポトキラー水和剤	1000	発病前～ 発病初期	—	散布
	300g/10a			常温煙霧
	10～15g/10a/日			ダクト内投入
ロブラールくん煙剤	くん煙室容積 300～400 立方 ^尺 (高さ 2m, 床面積 150～200 m ²) 当り 100g(50g×2 個)	前日	4 液剤との 総使用回 数	
スミレックスくん煙顆粒	くん煙室容積 100 立方 ^尺 (床面積 50 m ² ×高さ 2m)当り 6g	前日	3 液剤との 総使用回 数	

※水和剤の汚れに注意する

アブラムシ病

薬剤名	濃度	使用時期	使用回数	備考 注意点
パンチョTF顆粒水和剤	2,000	前日	2	トリフミンとの混合剤
サンリット水和剤	2000～4000	前日	3	
スコア顆粒水和剤	2000	前日	3	
ラーイー水和剤	4000～8000	前日	3	
カリグリーン	800～1000	前日	—	葉面散布剤との混用不可
ハーモメイト水溶剤	800～1000	前日	—	

ダニ

薬剤名	濃度	使用時期	使用回数	備考 注意点
ダニサラバフロアブル	1000	前日	2	汚れに注意
コロマイト水和剤	2000	前日	2	乳剤は親株床のみの使用
マイトコーネフロアブル	1000	前日	2	汚れに注意
バロックフロアブル	2000	前日	1	
スターマイトフロアブル	2000	前日	1	葉面散布剤との混用不可

アブラムシ、スリップス類

薬剤名	濃度	使用時期	使用回数	適用害虫 ほか
モスピラン水溶剤	2000～4000	前日	2	アブラムシ(アザミウマ類 2000 倍)
ウラドライフロアブル	2000～4000	前日	2	アブラムシ (コナジラミは 2000 倍)
バリアード顆粒水和剤	2000～4000	前日	3	アブラムシ (コナジラミは 2000 倍)
アーデント水和剤	1000	前日	4	アブラムシ ハダニ類 ミカンキロアザミウマ 汚れに注意
マッチ乳剤	1000～2000	前日	4	スリップス類
カスケード乳剤	4000	前日	3	IGR 剤(脱皮阻害)のため、遅効的
カウンター乳剤	2000	前日	4	だが卵、幼虫に効果あり

※ 水和剤の十後れに注意する

【親株防除事例】

時期	薬剤名	使用濃度	時期、回数	備考
3 月上	ゲッター水和剤	1000	前日 3 回	この後古葉、花蕾を除去
3 月中 ～下	キノンドーフロアブル	500～800	育苗期 3 回	じっくりと散布する
4 月 1 回目	デランフロアブル	1000	育苗期 2 回	降雨の前後、手入れ前後 には必ず防除してください
〃 2 回目	キノンドーフロアブル	500～800	育苗期 3 回	い

- 1 散布前は必ず農薬ラベルの確認と飛散防止の徹底!
- 2 散布後は必ず散布器具(タンク等)の洗浄と防除履歴の記帳!